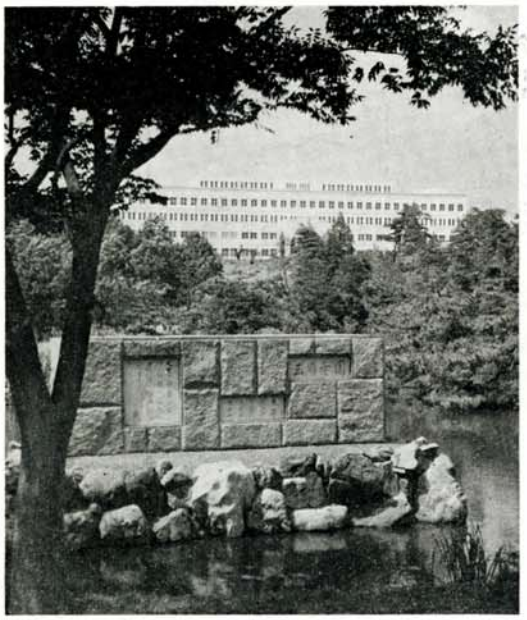
玉川・矢崎提携の通信教育

“富士高校”に正式認可



玉川学園入口付近から

学長のモットーを刻んだ石碑と丘の上の大学文学部校舎

昨年から準備が進められていた玉川学園の高校通信教育〝富士高校〟に一月二十七日付で文部省、東京都から正式認可がおりた。富士高校は矢崎の要請と協力をうけた玉川が同校内に本部をおく通信教育の高校として、設置を申請中であったもの。これによって矢崎の若い中卒社員たちは働きながら学べ、正式な高校卒の資格をうけることができるわけで、全体のレベルアップに大きく役立つものとみられる。開校式と入学式は四月十二日玉川で開催。これには矢崎から約七百名の中卒社員が富士高校生徒として参加する。

若い人の向上心に期待

富士高校正式認可のニュースと同時に、相変らず東奔西走の忙しい矢崎社長を本社社長室でとらえ、五分間インタビュー。社長の〝教育〟に対する理想を聞いてみた。

「常務会で決定したことだけじゃ駄目なんだ。作る売るの第一線が真の教養を身につけて、みんな〝社長代理〟として社会のどこへ行っても通用する、そうならなければ、みんなの幸福な繁栄もなく、また企業も伸びない」。開口一番、社長は断定する。

「もちろん、口ばかりの大声では誰もついてこない。だからしっかりした組織を作らねばならない。会社にとってもキビシイことだが、みんなはかたく信じている。考えてみたまえ、あのタコグラフでさえ法制化がきまるに三、四年かかった。一商品にしてそうだ、まして〝人づくり〟とくに〝教育〟の根本精神なのだ」

長い目で体質改善

矢崎社長〝教育〟を語る

……ではその効果は？

「時間を気にすることはない。線香花火的ならやらない方がいい。我々の考えは遠大である。十年、二十年かろうと、それが矢崎の体質改善をはかり、かつ広く社会のお役に立つ人材を作る。そう私はそんな甘いもんじゃない。何事も努力して積み上げる。そしてどこよりも先きに実行に移すことだ」

高い理想と共に現実のキビシサがひしひしと伝わってくるような言葉である。

〝ヤルのはあなた〟

生徒のみなさんに

門奈専務の話

まさに〝破天荒の壮挙〟といってもよい高校通信教育で全体のレベルアップをねがい一人でもより幸せになってもらうため、会社は大きな犠牲を払ってまで推進します。

教育指導員も各地におかれ皆さんの良き相談相手になってくれます。このように教育組織はますます立派になりますが、問題は教育をうける皆さんがこの組織にどう応えてくれるかです。〝働きながら学ぶ〟通信教育はそれだけ強い意志と努力が必要。この制度の成功、不成功のカギは皆さんの努力と意志だと断言できます。

なんといっても最後にモノをいうのは、あなた自身の努力だということをどうぞお忘れなく。それが〝自学自習〟の意味なのです。どうか勉強に精進されて、将来入社して会社の〝社立学校〟花ざかりである弟や妹たちのお手本になる立派なものを築いて下さい。本当にヤルのは、あなたなんですよ。

立派な社会人として

樋口専務の話

日本の教育は将来欧米なみに高校まで義務教育化の傾向が強い。おそくとも現在の中卒者がやがて父、母となる頃には実現されるだろう。つまり良き父母として自身の子供を教育する上にも、自身が高卒の学力をつけておくべきではないだろうか。

会社のレベルアップ

一方会社自身一番大切なことはチームワークの問題である。特殊技能者が一人だけいても意味がない。全体がそろってレベルアップしてこそ永久の繁栄が約束される。いま自身の〝腕〟のみ過信し、現代の若い部下を納得させるに足る条件を備えていない中堅幹部も少くないようだ。

この〝空白〟というか〝ミゾ〟はいずれ解消されねばならない。どうしても今後のリーダーはますます立派にならねばならない。

将来の指導的幹部に

一般従業員は次第に中卒より高卒者が多くなる。その人々の中から指導的幹部が出現する。おそくとも現在の中卒者がやがて父、母となる頃には、高卒程度の学力と広い視野、豊富な経験をもった人が必要となる。

なぜ教育を断行するか

〝職人〟として腕を磨こうとだけする人はともかく、人のリーダーたらんと望む者はこの通教制度を利用してほしい。たしかに通教はつらい。仕事と勉強の〝二人前〟の苦労である。その苦しみに耐えぬいた人こそ将来のリーダーはならない。

〝教育〟は社業の一環

会社は重大な決意をもって開始した。本来の利益をこの〝教育〟の形で、従業員に還元するという現実を直視してほしい。生徒もまた「教育をうけてやる」といった考えでは甘すぎる。大きな犠牲をはらいながら、このように協力指導を行なうもの。

協力校に県内二校

沼津市立高、私立島田学園の二校が富士高の協力校にきまった。通教の面接授業などで協力指導を行なうもの。

資本は人なりを実現

中卒社員全員を対象に

○…鉄鋼短大、紡績工高、日立工専、丸善石油学院、松下工学院、積水高等学院、石川島工高など限りがない。業界上に、若い世代全般のレベル向上をあくまで考え、玉川学園に新設の〝富士高校〟に全面的参加をきめた。社員生徒の授業料はもとより学校への物心両面の協力援助は年を追って巨額なものになろう。

○…しかし矢崎マンなら一人も落伍せず「社会の必要とする一般的な学問」を修め、足なみ揃えて成長してゆこう。二十年、百年先きをみつめた高い理想の人づくりが、この富士高参加にうかがわれる。

○…高校の通教制度はそう多くない。まして企業と学校が結ばれた形ではソニーと提携の私立平沼高がある程度で、この富士高はより密着した産学協同として日本最初のものといっていいのではないか。

○…若手全体の教養向上は富士高で。技術者養成は社内の高卒から選抜して玉川大に送りこむ「大学委託生」。社内で職能、階層別に合宿させ団指導する「社内訓練」。タイムリーに社宅夫人まで対象として実施する一般的な「移動教室」。これら一連の制度化で、教育は会社の重要事業の一つとなった感が深く、本は人なりの具象化として矢崎躍進の〝核〟となった。

全人教育

小原学長の理念

……では社長はいったい現代の若い人たちをどう見ておられますか？

「若い古いをとわず、我々は社会の企業の組織の中の一員だ。その中の一人が駄目なら組織は崩壊する。漫心は絶対に禁物である。だから、いつも自分は足りない、もっと勉強したいと願っている若者である。十年、二十年かろうと、それが矢崎の体質改善をはかり、かつ広く社会のお役に立つ人材を作る。そう私は高い理想と共に現実のキビシサがひしひしと伝わってくるような言葉である。

立派な社会人として

樋口専務の話

日本の教育は将来欧米なみに高校まで義務教育化の傾向が強い。おそくとも現在の中卒者がやがて父、母となる頃には、高卒程度の学力と広い視野、豊富な経験をもった人が必要となる。

なぜ教育を断行するか

〝職人〟として腕を磨こうとだけする人はともかく、人のリーダーたらんと望む者はこの通教制度を利用してほしい。たしかに通教はつらい。仕事と勉強の〝二人前〟の苦労である。その苦しみに耐えぬいた人こそ将来のリーダーはならない。

〝教育〟は社業の一環

会社は重大な決意をもって開始した。本来の利益をこの〝教育〟の形で、従業員に還元するという現実を直視してほしい。生徒もまた「教育をうけてやる」といった考えでは甘すぎる。大きな犠牲をはらいながら、このように協力指導を行なうもの。

協力校に県内二校

沼津市立高、私立島田学園の二校が富士高の協力校にきまった。通教の面接授業などで協力指導を行なうもの。

全人教育

小原学長の理念

棒暗記と点数の〝片輪教育〟が往行する昨今、玉川学園の存在はけだし一服の清涼剤である。正しく稼ぐ反面社会へ奉仕を忘れない完全人格を熱望する全人教育。労しみ作り、体験し、試み、考え、行なう、いわば〝自身のヒタイに汗する〟労作教育。同じ岸を歩む仲間として「君は川流を汲め我は薪を拾わん」家族的な同甘共苦の塾教育を校長に富士高校は発足する。それにしてもナント矢崎の理想と合致する事か。

玉川っ子がモットーとする「人生の最も苦しいいやな辛い損な場面を真っ先に微笑を以って担当せよ」の開拓魂、「ノービジョン、ザピープル、ペリッシュ」（幻なければ民亡ぶ）の若い夢と先見性、すべてが小原国芳学長（写真）の教育理念だ。この小原氏の理念に共鳴し、しい向上心をもち続けさせる玉川の根本思想とその点我々は一致しているわけだ。

うちの若い人は本当によくやっている。工場でも支店でも若い人が元気にがんばっているのを見、私自身も勇気が出る。ハッパをかけられるようだ。ヨーシッとこっちも時間をかまわずがんばってしまうよ」

サア、これからまた一仕事だと社長はドアへ歩きかけながら、ふり返って早口でいった。「矢崎の幹部はこの働きつつ学ぶ若い人の人格を愛情をもって認めなければならないえ。そしてお互いにはげましあって伸びていくのだ」

自学自習を追求

通信教育は自学自習を建前にレポート、学習書や教材の独習、スクーリング（面接授業）から成るが、各工場には気軽に勉強できる自習室、参考書、辞書が用意され、補助教師役の指導員もいて生徒の勉学を助けている。

二月十五日御殿場一休荘で制で面接授業に出席できない③社内訓練は時間内、通教も義務づけで時間内にやれぬか③脱落者は大きな目的より身近な効果を求めているようだ

＜学校側から＞①まず教育をうけるのだという気構えづくりが先決②三の力しかない子の力の子が五しかとらなかった場合、玉川は前者を立派だと評価する学校である③富士高は一般通教よりもっと進んだ形。甘えすぎぬように。

＜田名瀬重役から＞①他社は「ついてくる者だけを対象」矢崎の教育はみんなが対象だ②義務づけの前に矢崎ならそうしなくてもできる方法があるのではないか③身近な効果なるような体制ができる④担当者は自信と勇気を持て。

＜指導員側から＞①通教と花嫁修業が両立できない②三部

生徒の気持になって

一休荘で指導員と先生が懇談

懇談会では指導員の悩みも卒直に発表された